

《インタビュー記録》

## 歴史教育体験を聞く

吉田寅先生

日時：2008年12月7日

2009年2月22日

2009年3月13日

場所：東京都練馬区北町

聞き手：茨木智志・鈴木正弘

### はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた諸先生方の歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、様々な経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回の「歴史教育体験を聞く」では、吉田寅(よしだ とら)先生にお話を伺うことができた。吉田先生は1926年のお生まれで、長く高等学校で世界史教師として教育に従事された後に、筑波大学・立正大学で東洋史学者として研究に携わって来られた。その間に、中国社会経済史研究、中国キリスト教史研究を進められる一方で、世界史教育の研究者としても活躍されている。今回のインタビューでは、特に世界史教育を中心にお話を伺った。

以下は、吉田寅先生のインタビューの記録である。

### 1. 戦争中の東京高等師範学校への入学

— よろしくお願ひ致します。まず、はじめに、東京高等師範学校に入学される前後のことからお聞かせ下さい。

私は、大正15(1926)年8月に東京市麻布区<sup>こうがい</sup>筈町(現・東京都港区)で生まれ、小学校を卒業後、昭和14(1939)年4月に東京府立第十中学校(現・東京都立西高等学校：東京都杉並区)に入学しました。小学校や中学校で受けた歴史の内容は、今ではよく覚えていません。

十中の4年生のときに、「満洲」の吉林(現・中華人民共和国吉林省吉林市)にあり

ました師道大学<sup>1</sup>を受験しました<sup>2</sup>が、不合格でした。試験は、東京の千駄ヶ谷（東京都新宿区）にある日本青年会館で受けました。口頭試問で草原の英雄アッティラ<sup>3</sup>について聞かれ、当時は全く知らずに答えられませんでした。

そして、5年生のときに東京高等師範学校<sup>4</sup>を受験し、中学（卒業時には、東京都立第十中学校）を卒業して、昭和19（1944）年4月に入学しました。地理歴史科を専門にする文科第四部を選んだのは、地理歴史がおもしろそうであったという動機からです。文科第四部の同級生は約50人在籍しておりました。

— 戦争中の高等師範学校での生活は、どのようなものでしたか。

戦争中でしたので、上級生は学徒勤労動員で工場に出かけることが多かったのですが、私たち1年生は比較的、まだ授業を受けることができていました。その後、昭和20（1945）年に入ると、私たちにも陸軍燃料本部の勤労動員が始まり、府中の競馬場（東京競馬場：東京都府中市）でトラックの運転の練習をしました。

この動員は4月に解除されましたが、この頃にはB29（米軍の大型爆撃機）による空襲が数日おきにありました。5月25日の大空襲<sup>5</sup>では、高等師範の寮（桐花寮）が焼け、猛火の中を友人と逃げました。このとき、図書館にあった貴重な本もたくさん焼けてしまいました。

— 当時、憲兵に尋問を受けたと伺いましたが、どのようなものだったのでしょうか。

寮を焼け出された私たちが仮住まいしていた附属小学校に、6月中旬だと思いましたが、二人連れの私服の憲兵<sup>6</sup>がやって来ました。一人はとても目が鋭かったのを覚えています。文科第四部の代表として、私と同級生の二人が呼び出され、木村正雄<sup>7</sup>先生と家永三郎<sup>8</sup>先生について、しつように尋問されました。ほとんど講義を受けていなかった私たちからは、あまり情報が得られなかったようで、不興気に帰って行きました<sup>9</sup>。

---

<sup>1</sup> 師道大学：吉林市にあった「満洲帝国」の中等教員養成のための高等教育機関。当時の日本での高等師範学校に該当した。

<sup>2</sup> 旧制の中学校は5年制であったが、4年修了時にも上級学校を受験し、入学することが可能であった。

<sup>3</sup> アッティラ（大王）：5世紀のフン族の王。ヨーロッパ中部に大帝国を築いた。

<sup>4</sup> 東京高等師範学校：中等段階の学校教員養成のための4年制の高等教育機関。東京文理科大学等とともに、戦後の新学制下では東京教育大学となり、現在は筑波大学となっている。現在の東京都文京区にあった。

<sup>5</sup> 5月25日の大空襲：1945年5月25日における東京の山の手を対象とした大規模な空襲。

<sup>6</sup> 憲兵：軍事警察官。特に日本軍の憲兵隊は、戦争中に思想取り締まりなどの活動を強力に押し進めたことで知られる。

<sup>7</sup> 木村正雄：1910～1975年、東洋史専攻。

<sup>8</sup> 家永三郎：1913～2002年、日本史専攻。

<sup>9</sup> このことに関しては、吉田寅「終戦前後の家永教授」（家永三郎教授東京教育大学退官記念論集刊行

木村正雄先生は、授業の中で、当時の日本のことを天の権威が支配する社会、「天意的社会」などと、中国のこととして、たくみに説明されていました。かなり憲兵も調べていたようでしたし、今度、大きな取締りがあれば、木村先生は危なかったようです。その後、木村先生は、一日おきに住所を変えていたと聞きました。周りの先生方もずいぶん心配されていました。

## 2. 召集令状と復学

一 戦争中に召集を受けて学徒出陣されたと同っていますが、東京高等師範学校に在学中のことになりますか。

そうです。赤紙の召集令状を受けて、昭和 20 (1945) 年 6 月下旬に山梨県甲府の連隊に入隊しました。間もなく、甲府に空襲がありました<sup>10</sup>。私のすぐ脇に、焼夷弾が落ちたこともありました。

その後すぐに、山梨から鳥取に列車で移動しました。途中の岐阜は、空襲で街が焼けている最中でした<sup>11</sup>。その中を私たちの部隊が乗った汽車が通って行きました。このとき、線路の枕木も燃えていました。それでも、どうやら戦死を免れましたが、思えば、恐ろしい経験をしたものです。

鳥取県では、大山のふもと<sup>だいせん</sup>の米子郊外で、野営をしていました。そして、ここで、8 月 15 日正午に「玉音放送」を聞きました。そのときは、ラジオがガーガー、ピーピーいっただけで、さっぱり聞き取ることができませんでした。午後になって古年兵<sup>12</sup>が確認をして来て、ようやく内容が分かりました。

9 月になって除隊になりますが、そのときに、「なんでも必要なものを持って行け」と、一抱えの包みをくれました。除隊して、分かったことは、お米があれば何とでも交換できることと、毛布が非常に役にたつことでした。家族は、長野県の戸倉 (現・千曲市) に疎開していました。

## 3. 東京文理科大学への進学と当時の生活

一 復員して、東京高等師範学校に復学され、その後、東京文理科大学に進まれたとい

---

委員会編『家永三郎教授東京教育大学退官記念論集 3 日本国憲法と戦後教育』三省堂、1979 年)にも詳しく述べられている。

<sup>10</sup> 甲府空襲：1945 年 7 月 6 日～7 日の甲府市に対する空襲。市の大半は灰燼に帰し、1100 人を超える死者を出した。

<sup>11</sup> 岐阜空襲：1945 年 7 月 9 日夜の岐阜市に対する空襲。市の中心部を焼失し、800 人を超える死者を出す被害を受けた。

<sup>12</sup> 古年兵：1 年以上勤務した兵のこと。これに対して、1 年未満の者を初年兵という。

うお話ですが、中学生のころから、東洋史を専門にしたいと考えていらしたのですか。

いえ、私は後に東洋史を専攻することになりますが、高等師範に在籍していたときは国史（日本史）を専攻していました。同級生の千葉<sup>ひろし</sup><sup>13</sup>氏と一緒に東洋史を受けることを誘われまして、昭和 22（1947）年 3 月に高等師範 3 年を修了し、4 月からは東京文理科大学に入学して東洋史を専攻することになりました。

実は、当時は東洋史にどんな先生方がいらしたのかもよく分かっていませんでした。このときの東洋史の入学生は私を含めて 8 人でした。東京文理科大学には国史学教室と東洋史学教室がありました。西洋史学教室がありませんが、暗黙の了解で西洋史は広島文理科大学（現・広島大学）が担当していました。

当時の高等師範は、4 年で卒業する他に、私のように、3 年修了時に文理科大学 1 年に入学する道もありましたし、これとは別に、3 年修了で教師に就職する道もありました。

— 復学された敗戦間もないころの生活は、どのようなものでしたか。

敗戦後は、食事も大変でした。アメリカのハーシー（Hershey）という会社の板のチョコレート<sup>13</sup>の価値は、今では考えられないほど、とても高かったですね。一切れでも貴重でしたし、食べ残されたお菓子を丹念に集めたようなものすら、価値がありました。

当時、大学の研究室で起居していた岡本敬二<sup>14</sup>氏からは、「吉田君、また持ってきてくれるかな」などと言われたようなこともありました。岡本氏は学士院賞を受けた方ですが<sup>15</sup>、受賞のときに、厳しい環境の中で研究を進めたと、新聞で賞賛されていました。

同級生の長瀬守<sup>16</sup>氏は、不思議と外食券<sup>17</sup>をよくお持ちでした。この頃の事を思い出すと、私は色々なものを見たという思いがします。また、私はあちこちで親切にして頂きました。勉強をするのでも、辞典を手に入れるのすら大変な時代でした。

文理科大学の 2 年生だった昭和 23（1948）年から 2 年間ほど、アメリカの進駐軍<sup>18</sup>の仕事をしました。

内容は、進駐軍が接收していた野球場などの夜間の警備でした。当時はステイトサイ

---

<sup>13</sup> 千葉<sup>ひろし</sup>：東洋史専攻。

<sup>14</sup> 岡本敬二：1920 年生まれ、東洋史専攻。

<sup>15</sup> 岡本氏は、1957 年に神田信夫・岡本敬二他 3 名による「満文老档本文篇第一卷太祖 1 及び第二卷太祖 2」で日本学士院賞を受賞した。

<sup>16</sup> 長瀬守：1923 年生まれ、東洋史専攻。

<sup>17</sup> 外食券：戦中から戦後にかけて、都市部には米穀の配給制度が施行されていたため、「食堂」で食事をする場合には、外食券を必要とするのが基本であった。

<sup>18</sup> 進駐軍：敗戦後の日本を占領したアメリカ軍を中心とする連合国軍に対する呼称。

ド・パーク (Stateside Park) と呼ばれた神宮球場、ナイル・キニック・スタジアム (Nile Kinnick Stadium) と呼ばれた国立競技場などに夜、泊まりに行きました。当時、貴重であった運動器具などの警備を厳重にするためのナイト・ガードでした。担当者が一人、泊り込むことにはなりますが、国立競技場は広いので、一晩に二人が泊まりました。

週のうち、三日、夜 8 時から朝 8 時までの夜勤という生活はとても大変でした。ただし、一般には夜でも電気は一時間ほどしか使えなかったこの時期に、進駐軍専用の施設ということで、夜間に制限もなく電灯で本が読めるのは魅力でした。また、夜中に懐中電灯を持って水泳場など歩いていると、ピチャピチャと音がしたりして、怖かったことを思い出します。

— 大学卒業後は、大学院に籍を置かれていたと伺っておりますが、その頃のことをお聞かせ下さい。

昭和 25 (1950) 年に文理科大学を卒業した後、「特別研究生」となりました。特別研究生には奨学金が出ました。研究科の 5 年間の課程を修了するときに、「五代史の研究」で東京文理科大学閉学記念賞を頂きました。第 1 回の賞は桜井徳太郎<sup>19</sup>氏で、第 2 回が私でした。

#### 4. 明治学院中学高校での「世界史」

— 就職された明治学院でのことについて、お話しください。

明治学院中学高校 (東京都港区) に就職しました。正教員であった 7 年間を含めて、10 年間、勤めました。プロテスタントの明治学院に就職したのは、私が戦後に、キリスト教の洗礼を受けていたことと関係しています。また、私がキリスト教史の研究を始めたこととも関係していると思います。

明治学院には、はじめは文理科大学在学中に非常勤で勤めました。社会科の先生方は揃っていませんでしたので、世界史ではなく、国語科漢文の教師としてでした。当時は高校 1～3 年で、漢文は週 2 時間が基本でした。私は、社会科とは別に、漢文の教員免許も持っていました。

ただし、世界史の授業を担当する機会がありました。世界史の東洋史を担当されていた高橋泰郎<sup>20</sup>氏がお病気で一時期、お休みする間を、私が兼任しました。東大の東洋史のご出身であった高橋氏は、加藤<sup>しげし</sup>繁<sup>21</sup>門下で、唐代の絹織物業の専門家として著名な

---

<sup>19</sup> 桜井徳太郎、1917～2007 年、民俗学専攻。

<sup>20</sup> 高橋泰郎：1915 年生まれ、東洋史専攻。

<sup>21</sup> 加藤繁：1880～1946 年、東洋史専攻。

方です。お酒の好きな高橋氏からは、「うちに泊りに来て、一晚、ゆっくり話そう」とか、声をかけて頂いたりしていました。「自分は、イスラームのことを何も知らない」と気付き、イスラームの分野に強い関心をお持ちになって、ご勉強を始めたと言いました。非常に学問的なかたでした。私にも、「イスラームをやらないか。できるだけことは教えてあげよう」と誘われたこともありました。

私が当時の世界史教科書などに興味を持ち、大切にしていたのは、高橋氏から「こういうものをもっと重要視しないといけない」と言われたことに関係しています<sup>22</sup>。

— 当時の世界史の授業は、どのようなものでしたか。また、この頃の明治学院は、どのような雰囲気だったのでしょうか。

明治学院でのこのときの世界史は、週5時間を、東洋史2時間と西洋史3時間に分けて、二人の教師が授業を行っていました。私が兼任したのは、この中の東洋史2時間の部分です。2クラスを担当しました。

教科書は、西洋史の尾鍋輝彦<sup>23</sup>氏が執筆された『100ページの世界史』<sup>24</sup>を使っていました。はっきりと記憶にないのですが、尾鍋氏は、明治学院に関わっていたと思いました。この教科書は2年くらい使いました。正直に言えば、尾鍋氏が西洋史専攻のためか、東洋史の授業では使いにくかったですね。ただし、この教科書は、かなり多くの高校で使用された、初期の世界史教科書を代表する名著です。東洋史関係の資料は、日本では比較的、簡単に手に入りましたが、西洋史関係のものは貴重でした。

世界史を、東洋史と西洋史に分けて授業をすることは、現在から見れば、違和感がありますが、学問の系統にそっている面があるため、ある意味で授業はしやすかったです。

明治学院高校は、共学で1クラス30人という学校でした。私立で共学であることも、30人という人数も、この頃では珍しかったと思います。当時の明治学院を取り巻く環境には、戦争中に受けたキリスト教抑圧の時期を経て、キリスト教に寛容な独特の雰囲気がありました。ただし、その反動からか、明治学院大学では1960年の学生運動でのいわゆる“ぶち壊し”が一番、ひどくなりました。このあたりの問題は、誰かが研究対象として、解明してくれればと思います。

また、この当時の私は、可能な限り、社会科教育の研究会にも出席し、諸先生から多くのご示教やご提言などを頂き、教材の調査などを積極的に心がけておりました。

---

<sup>22</sup> 吉田寅「『世界史』成立前後の教科書・準教科書について」(『立正大学人文科学研究年報』第28号、1991年3月)において、敗戦直後から1950年までの外国史・世界史の教科書や準教科書などの考察がなされている。

<sup>23</sup> 尾鍋輝彦：1908～1997年、西洋史専攻。

<sup>24</sup> 尾鍋輝彦『100ページの世界史』新教育事業協会、1949年(吉田寅氏が実際に使用したのは1950年5月第21版)。

## 5. 東京学芸大学附属高校での世界史教育研究

— その後、移られた東京学芸大学附属高校について教えてください。

昭和 36 (1961) 年 4 月に東京学芸大学附属高校 (東京都世田谷区) に移ります。今度は世界史教師としてでした。ここで本格的に世界史教育を担当することになります。附属高校には、27 年間、勤めました。

附属高校はまだ創設期にあり、当初は、世界史担当は私が一人でした。その後、佐藤進<sup>25</sup>氏が同僚となり、佐藤氏の後は、大阪教育大学附属高校にいらした木下康彦<sup>26</sup>氏が赴任して来ました。

木下氏とは一緒に、ずいぶんと研究活動をしました。これ以後の私の世界史教育に関わる研究は、附属高校の研究会で進めたものが中心です。ただ、今から振り返ると、学習指導要領にそった書き方をしたり、ある意味で文部省と結びすぎた面もあったようにも思います。

— 吉田先生が手がけられた世界史教育の表記法について、教えてください。

世界史の表記法についての私の研究は、伊瀬仙太郎<sup>27</sup>氏を中心とした「世界史教育上における表記法の系統的研究<sup>28</sup>」の分担研究者として手がけたものです<sup>29</sup>。

表記法については、附属高校で世界史の同僚であった木下康彦氏が、特に研究の必要を主張していました。連名で「世界史教育における表記法の検討」を書きました<sup>30</sup>。喫茶店に行って、二人で打ち合わせをしたりしました。

その後、「世界史教育における表記法の沿革と現状」を書きました<sup>31</sup>が、これまで世界史の表記法について、まとめたものはありませんでした。非常に大切なことですが、その割に、表記法の問題はあまり重んじられていません。表記法というのは、どう表わすかということですから、一番、基本的で大事なことです。

---

<sup>25</sup> 佐藤進：1930 年生まれ、古代オリエント史専攻。

<sup>26</sup> 木下康彦：1937 年生まれ、歴史教育・社会科教育専攻。

<sup>27</sup> 伊瀬仙太郎：1913～1999 年、東洋史専攻。

<sup>28</sup> 「世界史教育上における表記法の系統的研究」科学研究費補助金試験研究、研究代表・伊瀬仙太郎、1968 年度・1970 年度・1971 年度。

<sup>29</sup> この時期の表記法に関わる論文としては、吉田寅「世界史表記法の問題点—現状の分析を中心として—」(『総合歴史教育』第 6 号、1970 年)がある。

<sup>30</sup> 吉田寅・木下康彦「世界史教育における表記法の検討」『東京学芸大学附属高等学校研究紀要』第 12 号、1975 年。

<sup>31</sup> 吉田寅「世界史教育における表記法の沿革と現状」(『生江義男先生還暦記念歴史論集』同刊行委員会、1978 年)。本論文に注 29・30 の論文により加筆した論文が、吉田寅『世界史教育の研究と実践』(教育出版センター、1986 年)に収録されている。

— 次に、文学作品を利用した世界史学習について伺います。吉田先生は、50の文学作品を選んで、世界史教育からの視点を示されています<sup>32</sup>が、これは先生ご自身が、お読みになって選んだものですか。また、国語教師として漢文を担当されていたご経験を活かされたかと存じますが、いかがですか。

そうです。もちろん全部、読んだものから、私が選んで書いたものです。若い頃から、歴史をテーマとした文学はよく読んでいました。授業展開の中で利用していた文学作品の中から、色々なものを参考にして、主要なものを50冊、選んだものです。世界史教師として、生徒の興味や意欲をわきたたせる工夫に取り組んできました<sup>33</sup>。

確かに、漢文を受け持った経験が、文学作品を利用した世界史学習に取り組んだことと関係しているかもしれません。私は、この中では、唐の白楽天（白居易）の「長恨歌<sup>34</sup>」が一番好きです。それと、パール=バックの『大地<sup>35</sup>』もいいですね。

— 『大地』については、映画を生徒に見せての実践も、昭和40（1965）年になされています<sup>36</sup>が、これは芸術鑑賞教室を利用したものですか。

いえ、そうではなくて、これは世界史の見地から中国史を見直そうという社会科教育としてのものです。

— 東京学芸大学附属高校で作成された「世界史資料集」についてお聞かせ下さい。

附属高校に移ってから、世界史教育の発展的展開を目指して、さらに新しい教材開発

---

<sup>32</sup> 『月刊歴史教育』（第29号、1981年8月）の特集「文学作品を使った歴史学習」に掲載したものが、吉田寅・前掲『世界史教育の研究と実践』に「文学作品の内容と世界史教育の視点」として加筆・収録されている。

<sup>33</sup> 吉田寅「文学に現われた世界史」（『東京学芸大学附属高等学校研究紀要』第2号、1964年）、共著『文学作品を利用した世界史学習』（星村平和編著、学事出版、1976年）、吉田寅「文学と歴史学習」（加藤章他編『講座・歴史教育2 歴史教育の方法と実践』弘文堂、1982年。これらは、吉田寅・前掲『世界史教育の研究と実践』に「文学作品を利用した世界史学習」としてまとめられている。

<sup>34</sup> 「長恨歌」：中国唐代の詩人・白居易（772～846年、号は楽天）が806年に詠んだ漢詩。叙事詩の体裁で、玄宗と楊貴妃の史実を美しく脚色している。

<sup>35</sup> 『大地』：アメリカ人宣教師の娘として中国で育った小説家であるパール=バック Pearl S. Buck（1892～1973年）が、1931年に発表した歴史小説。辛亥革命前後の激動の時代に、大地に生きる中国農民の姿を描いている。原題はThe Good Earth。1938年にノーベル文学賞を受賞した。映画は1937年にアメリカで作成された。

<sup>36</sup> 吉田寅・三田忠恒『『大地』全体鑑賞報告書』（『東京学芸大学附属高等学校研究紀要』第3号、1965年。本稿は、吉田寅・前掲『世界史教育の研究と実践』に収録されている。



の努力を致しました。

世界史の授業を生徒にとって興味あるものにするために、まず考えたのが「世界史資料集」の作成でした。当時、市販の世界史の資料集は、若干、ありましたが、当然ながら、附属高校の授業展開に当てはまるように編集されてはいません。そのため、自分でガリ版刷りのプリントを作成し、毎時間、配布しました。この方法は、生徒にとって受動的になりがちな授業を活性化し、歴史的思考力を深めるうえで、有効であったと思っています。

初期のプリントは、西洋史関係にかなりの難点がありましたが、やがて私の同僚として赴任された佐藤進氏、そして木下康彦氏によって、それぞれ入念な改訂が行われました。また、プリントをファイルに綴じ込ませるのでは分量が多くなってしまいますので、これをタイプ印刷に切り替えて、一冊の本に製本するようにしました。このようにして、附属高校の「世界史資料集」上・下が作成され、使用されました。

— 「世界史教育と郵便切手の活用<sup>37</sup>」で、郵便切手の歴史教材化を具体的に示されていますが、ここで使われている切手は、吉田先生のお手元にあるものでしょうか。

そうです。すべて、自分の持っている切手から選んだものです。私は、幼いころから切手に興味を持って集めていました。明治学院にいたときには、切手の同好会の顧問をしていたこともあります。

「世界史教育と郵便切手の活用」の中でも紹介しましたが、黒羽清隆<sup>38</sup>氏から頼まれて、切手を活用したパネル教材<sup>39</sup>を作ったこともありました。それから、私が担当して、いくつかの書籍で歴史に関わる多くの切手を掲載しました。

## 6. 世界史の学習指導要領

— 世界史の学習指導要領改訂に関わられたのは、東京学芸大学附属高校にいらしたときからになりますか。

はい、そうです。附属高校に在任中に、昭和 45（1970）年版と昭和 52（1977）年版の学習指導要領の改訂がありました。私は、この両度の改訂に、高校「世界史」教育の現場を代表する協力委員として会議に参加しました。当時、文部省の教科調査官として世界史の学習指導要領の改訂の衝に当たられたのが、昭和 45（1970）年版が平田嘉三<sup>40</sup>氏、

---

37 吉田寅「世界史教育と郵便切手の活用」『総合歴史教育』第 37 号、2001 年。

38 黒羽清隆：1934～1987 年、日本史専攻。

39 黒羽清隆監修『パネル日本史 近代編』上・下巻、飛鳥社、1987 年。

40 平田嘉三：1925～2008 年、西洋史・歴史教育専攻。

昭和 52 (1977) 年版が星村平和<sup>41</sup>氏でした。

— 昭和 45 (1970) 年改訂版について伺います。このときの「学習指導要領解説<sup>42</sup>」を見ると、世界史の解説の作成協力者として、吉田先生を含めて 10 名のお名前があがっています<sup>43</sup>。中心となったのは、どなたでしょうか。また、どのような話し合いが行われたのでしょうか。

中心となったのは、このとき教科調査官をされていて、その後に広島大学に移られた平田嘉三氏、そして東京学芸大学にいらした伊瀬仙太郎氏のお二人です。世界史の文化圏学習は、この学習指導要領から始まったものです。

伊瀬氏は、文化圏に対して非常にこだわりが、おありでした。文化圏学習というのは、一つの大きなテーマですから、あまり小さくまとめてはいけなないと、もっと基本的な学習が必要だと主張されていました。この点に関して、伊瀬氏は、いい意味でも悪い意味でも、やや発展的でした。新しいものがお好きで、しかも、どんどん話がグローバルに広がっていくかたでした。この点で、同じく協力者であった東京大学の木村尚三郎<sup>44</sup>氏と似ていらした面があるがゆえに、お二人は意見を異にする部分がありました。ただし、木村氏はお忙しい方でしたので、中心となったのは平田氏と伊瀬氏でした。私から伊瀬氏に、「あまり言いすぎないほうが…」と申し上げたようなこともありました。また、名前があがっている人が全員、同じ程度に関わっていたわけではありません。

私がこのときに、「解説」のどこを書いたのかは、今では、もう覚えていません。考えてみれば、責任の所在をはっきりさせるためにも、文責を明記すべきでしたね。それから、正直に言って、学習指導要領そのものについても、私たちが書いた部分もあります。

— (茨木) 以前、平田嘉三先生にお会いしたときに、「文化圏」というのは、フランスの書籍を読んでいるときに得た発想を、もとにしているとお話しされていました<sup>45</sup>。学習指導要領を検討されている中で、そのようなお話を聞かれたことはございますか。

41 星村平和：1931 年生まれ、歴史教育・社会科教育専攻。

42 文部省『高等学校学習指導要領解説 社会編』大阪書籍、1972 年。なお、このときの高等学校学習指導要領は、1970 年 10 月 15 日文部省告示第 281 号である。世界史としては、4 番目の学習指導要領であった。

43 同上書によれば、井上速雄（大成学園大成高等学校長）、伊瀬仙太郎（東京学芸大学教授）、紀藤信義（広島大学教授）、木村尚三郎（東京大学助教授）、桜井義英（神奈川県立横浜緑ヶ丘高等学校教諭）、鈴木貞三（東京都立西高等学校長）、中村道雄（東京都立西高等学校教諭）、平田嘉三（広島大学助教授）、吉田寅（東京学芸大学附属高等学校教諭）の 10 名である。

44 木村尚三郎：1930～2006 年、西洋史専攻。

45 平田嘉三氏には、トインビーに関わって、当時の世界史教育の背景を述べたものがある。平田嘉三「トインビー『歴史の研究』」酒井忠雄編『歴史と人間』（シリーズ人間の教育を考える）、講談社、1981 年。

文化圏の考え方の中心に当たる部分には、そのようなことがあるのかも知れませんが、もちろん、それだけではないと思います。

— 当時の学習指導要領の改訂の話し合いに参加されたご感想はいかがですか。

平田氏、伊瀬氏、星村氏および列席の諸先生方から、実に多くのことを教えて頂きました。それを直接または間接に、教育の現場で有効に活用することに努力しました。主題学習を積極的に取り入れたり、グループ討議による世界史学習を積極的に実施したりしたのも、今では懐かしい思い出の一つとなっています。

## 7. 大学への転任と世界史教育

— 『世界史教育の研究と実践<sup>46</sup>』（1986年）を出版されたのは、大学に転任されてからでしょうか。

昭和 59（1984）年に筑波大学歴史・人類学系（茨城県つくば市）に転任し、昭和 63（1988）年には立正大学文学部史学科（東京都品川区）に移りました。

『世界史教育の研究と実践』は、筑波大学に在任中に出しました。大学では東洋史学専攻ということで、「世界史」の授業はなくなりましたが、学習指導要領改訂を含めて、色々な形で世界史教育と関わりが続きました。

— ちょうど、その頃と存じますが、昭和 61（1986）年に「世界史」必修化を求めたアピールについて、吉田先生は、後日に次のようにお書きになっています。

〔以下、引用〕

…昭和六十一年初頭、緊急に作成し各方面に配布したのが「国際化の時代に逆行する世界史教育の現状」です。この文書の原案は私が執筆し、碧海純一<sup>47</sup>・福田歓一<sup>48</sup>・増田四郎<sup>49</sup>・村川堅太郎<sup>50</sup>・山本達郎<sup>51</sup>の諸先生の校閲ならびに加筆・訂正をいただいた上でアピール形式の共同宣言としました。この運動の中心となったのは山本達郎先生であり、この文書を持参されて精力的な活動を展開されたのです。私は社会科の中における「世界史」の必修化を意図して、この文書を起草したのですが、これが歴史科独立、社会科再編成の動きへの一つの出発点になろうとは考え

46 吉田寅『世界史教育の研究と実践』教育出版センター、1986年。

47 碧海純一：1924年生まれ、法哲学専攻。

48 福田歓一：1923～2007年、政治学専攻。

49 増田四郎：1908～1997年、西洋史専攻。

50 村川堅太郎：1907～1991年、西洋史専攻。

51 山本達郎：1910～2001年、東洋史専攻。

てもみませんでした<sup>52</sup>。

[引用、以上]

この中で述べられています「国際化の時代に逆行する世界史教育の現状」(1986年3月)<sup>53</sup>という文書は、どのような経緯で吉田先生が原案を起草されたのでしょうか。

背景には、共通一次試験<sup>54</sup>の実施以来の「世界史」の履修率の急激な低下がありました。ここにも書きましたが、山本達郎氏が精力的に活動していました。この文書には何人かの名前がありますが、中心は山本氏でした。あるとき、山本氏が「これから、行こう」と言って、二人で雨の中を車で行ったのが、村川堅太郎氏のお宅でした。山本達郎氏・澄子<sup>55</sup>氏のご夫妻は、キリスト教史研究の関係で以前から、よく知っていました。

— それで吉田先生が原案をお書きになった後に、他の5人の方々とは、具体的にどのように検討されたのでしょうか。また、自由民主党から参議院議員となっていた元東京大学総長の林健太郎<sup>56</sup>氏、それから教育課程審議会で重要な役割を果たすことになる木村尚三郎氏は、この文書に関係なかったのでしょうか。

私を含めた6人が、昭和61(1986)年3月の、これも確か雨の日に、神田(東京都千代田区)の山川出版社に集まって、検討をしました。碧海純一・福田歓一の両氏には、初めてお会いしましたし、お名前も知りませんでした。「加筆・訂正」はほとんどなかったと記憶しています。私がこの文書の原案を書きましたが、別紙資料は私が作成したものではありませんし、誰がつくったのかも知りません。また、このとき、高校社会科の再編成うんぬんの話は全くありませんでした。世界史のことをもっと強く推進していこうと決めたのは、次の会であったと思います。ただ、次の会に参加した記憶がないので、それに私は出ていなかったかも知れません。

木村尚三郎氏は、このときには、これに関係していませんでしたし、林健太郎氏には、私はお会いしたことがありません。この文書にお名前がある5人の東京大学の関係者は、いわゆる〈文部省派〉と異なる、ある意味で文部省からは距離を置いた、いわゆる〈学術派〉の研究者であるとも言えます。

---

<sup>52</sup> 吉田寅「『世界史』教育と中国塩業史研究の回顧」吉田寅先生古稀記念論文集編集委員会『吉田寅先生古稀記念アジア史論集』東京法令、1997年、365頁。

<sup>53</sup> 正確なタイトルは、「『国際化』の時代に逆行する世界史教育の現状—高校における世界史教育の危機—」。B4の用紙2枚、「一九八六年三月」付、記名は碧海純一・福田歓一・増田四郎・村川堅太郎・山本達郎・吉田寅の6名。B5用紙の別紙資料(〔資料1〕「世界史」履修率の推移、〔資料2〕都道府県別「世界史」履修率、〔資料3〕中等学校における歴史教育の変遷)が3枚、付けられている。

<sup>54</sup> 1979年度～1989年度に実施された、マークシート方式による国公立大学の入学試験。

<sup>55</sup> 山本澄子：1914～1997年、東洋史専攻。

<sup>56</sup> 林健太郎：1913～2004年、西洋史専攻。

その後、6人が集まることはありませんでした。しばらくして、高校社会科を再編<sup>57</sup>して歴史を独立させるということになりましたが、私はこれを新聞の報道で知りました。

— その次の世界史学習指導要領<sup>58</sup>（平成元〔1989〕年）は、木下康彦氏が中心になって作成されたと存じますが。

そうです。東京学芸大学附属高校で同僚であった木下氏が、文部省の教科調査官になっていました。木下氏のもとで世界史学習指導要領がつくられましたが、私もこれに協力者として参加しました。

— 吉田先生は以前に、世界史学習指導要領解説の「指導資料」を文部省で作成したが、諸般の事情で出版されなかったということ、雑誌『総合歴史教育』の「資料紹介」で述べられています<sup>59</sup>。それは、このときの改訂のことですか。

その通りです。世界史は木下氏のもとで、ほぼ完成していましたが、日本史で問題になったらしいと聞いています。

『総合歴史教育』の「資料紹介」でも書きましたように、その前回（1977年版）と前々回（1970年版）の世界史学習指導要領改訂のときにも、「指導資料」作成が進められましたが、出版には至りませんでした。

## 8. 世界史に関わる出版物

— 1979年から1984年まで発行されていた雑誌『月刊歴史教育』の編集に関わっていたと伺っていますが、どのようなお仕事をされたのですか。

---

<sup>57</sup> 高校社会科再編：1987年12月の教育課程審議会答申により、高校の「社会科」が解体され、「地理歴史科」と「公民科」に分割されたこと（同時に、小学校社会科も3～6年生に限定し、1～2年生の社会科は理科とあわせて「生活科」とされた。また、高校「世界史」を必修とした）。学習指導要領では、1989年3月告示の高等学校学習指導要領以来、現在に至る。教育課程審議会内での社会科解体への強引とも言える進め方に対して、反対する社会科学習指導要領作成協力者の辞任や社会科教育・歴史学に関わる学会・研究会などの諸団体による反対表明、社会科教員を中心とする高校や教員組合などによる反対決議・要望書提出が行われ、多くのマスコミでも問題視された。なお、文部省では基本的に「高校社会科再編成」と称したが、一般的には「高校社会科解体」と呼んでいる。

<sup>58</sup> 文部省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版、1989年。なお、このときの高等学校学習指導要領は、1989年3月15日文部省告示第26号である。世界史としては、6番目の学習指導要領であった。

<sup>59</sup> 吉田寅「文部省編『平成3年度 地区別高等学校教育課程講習会資料（地理歴史篇）』『総合歴史教育』第29号、1993年。なお、公民科の指導資料は発行されている（文部省『指導計画の作成と学習指導の工夫 一高等学校公民指導資料一』海文堂出版、1992年）。

『月刊歴史教育<sup>60</sup>』は、東京法令から出ていました。準備段階のことはよくわかりませんが、私は、創刊からはじめの2年間、編集に参加していました。その当時は、佐藤照雄<sup>61</sup>氏と星村平和氏が中心になって、編集では歴史学と教育の結びつきを目指しました。私の参加は、佐藤氏から依頼されてのことでしたが、二月に一度、小石川（東京都文京区）の東京法令出版に集まって話し合いをしていました。細かいことはよく覚えていませんが、企画やテーマでは苦勞しました。

一 吉田先生が執筆された世界史教科書についてお聞かせ下さい。

はじめに、日本書院の高校世界史教科書<sup>62</sup>を分担執筆しました。この教科書は、編集に携わられた伊瀬山太郎氏の関係で参加しました。その後、清水書院の世界史教科書<sup>63</sup>を分担執筆しました。清水書院では「現代社会」の教科書も書きました<sup>64</sup>。

それから、教科書ではありませんが、清水書院では『資料世界史<sup>65</sup>』という高校生向きの世界史資料集が、出版されていました。黄色い表紙の本です。ずいぶん以前のものになりますが、これにも私は分担で執筆していました。山崎宏先生を中心として東京教育大学<sup>66</sup>の東洋史研究室で書いたものです。当時は類書があまりなく、他のものは、程度と値段が高すぎたため、この『資料世界史』が読みやすく、見やすいということで、ちょうどよかったようです。確か105版か、106版まで発行されたと聞いています。

一 1977年に東京法令から『世界史資料』上・下2巻<sup>67</sup>として、世界史の授業に役立つ詳細な資料集が発刊されています。この資料集の中国史に関わる部分を見ますと、特に隋・唐以後の史料の多くに「吉田寅訳」と書かれています。吉田先生はこの部分を担当されたのでしょうか。

---

<sup>60</sup> 『月刊歴史教育』（歴史教育研究会編集、東京法令出版）は、1979年4月から1984年6月まで通巻63号まで発行された。この雑誌については、吉田寅『月刊歴史教育』の軌跡 付「総目次・執筆者索引」（『総合歴史教育』第32号、1996年）が詳述している。

<sup>61</sup> 佐藤照雄：1926年生まれ、日本史、社会科教育専攻。

<sup>62</sup> 1964～1966年使用の日本書院の世界史教科書には、和田清・山中謙二『高等学校世界史A』・『高等学校世界史B』があり、1967～1969年使用では同書の「新版」・「新訂版」が発行された。

<sup>63</sup> 井上智勇・田村実造ほか『世界史』清水書院、1972年4月10日検定が1973年度以降使用された。以後、同著者で「新訂版」「最新版」が1984年度まで発行された。次いで、池田温ほか『高等学校世界史』清水書院、1982年3月31日検定が1983年度以降使用された。以後、「新訂版」「三訂版」「最新版」が1996年度用まで発行された。これらに吉田寅氏が執筆している。

<sup>64</sup> 梶哲夫ほか『現代社会』清水書院、1981年3月31日検定。

<sup>65</sup> 山崎宏編『資料世界史』清水書院、1952年4月初版（確認できたものは、山崎宏編『資料世界史（修訂版）』清水書院、1961年4月修訂50版）。

<sup>66</sup> 注4参照。

<sup>67</sup> 木村尚三郎監修『世界史資料』上・下、東京法令、1977年。

そうです。もともになったのは鶴見尚弘<sup>68</sup>氏が出された 20 くらいの史料でした。それを 30、40 と増やしていったものです。全体的には、監修者になっている木村尚三郎氏がお弟子さんたちを集めて作成しました。編集のときに合宿をしましたが、お忙しい木村氏は「吉田さん、よろしく頼みます」と告げて、どこかに行ってしまったことが、可笑しく思い出されます。

他にも色々な出版物に関わりました。

## 9. 現在、取り組んでいること

— 現在、取り組まれていることについて、お聞かせ下さい。

東洋文庫<sup>69</sup>に研究員として週に 1 回ほど通っています。仕事は、中国史の社会経済史に関わる史料索引の作成などです。最近、出来たものは、これ(『宋会要輯稿 食貨篇 社会経済用語集成<sup>70</sup>』)です。

— 東洋文庫のお仕事とは別に、中国キリスト教の資料も編集されたと同っていますが。

戦後におけるプロテスタント教会と中国政府に関わる資料集作成に、研究会の一員として参加しました。2008 年 1 月に、『原典 現代中国キリスト教資料集 プロテスタント教会と中国政府の重要文献 1950—2000』として発刊されています<sup>71</sup>。

— 創設の頃から世界史教育をご覧になってきた吉田先生がお考えになる、世界史の教師として大切なことは、どのようなことでしょうか

世界史教育もずいぶん変わってきていると思います。なんでも同じですけど、ひたむきに勉強しなければならないと思います。

— 長い時間、お話をお聞かせくださいまして、本当にありがとうございました。

---

68 鶴見尚弘：1931 年生まれ、東洋史専攻。

69 東洋文庫：東洋学専門の図書館・研究所（東京都文京区）

70 東洋文庫編『宋会要輯稿食貨篇社会経済用語集成』東洋文庫、2008 年。

71 富坂キリスト教センター編『原典現代中国キリスト教資料集 プロテスタント教会と中国政府の重要文献 1950—2000』、新教出版社、2008 年。

## 後記

たびたびのインタビューのお願いにもかかわらず、快くお引き受けいただき、多くの貴重なお話を伺うことができた。ただし、聞き手の力不足により、吉田寅先生の中国社会経済史や中国キリスト教史等に関する研究の内容については、ほとんど伺うことができなかった。しかも、本インタビューの主題である世界史教育研究についても、十分にまとめることができていない。聞き手として、恥じ入るばかりである。

吉田先生の東洋史研究、世界史教育研究の一端については、「吉田寅先生・年譜および著作目録」（吉田寅先生古稀記念論文集編集委員会編『吉田寅先生古稀記念 アジア史論集』東京法令出版、1997年）も参照して頂きたい。

日本の高校「世界史」は1949年4月に授業が始まり、2009年4月には60年を迎える。その全体を見続けてきた吉田先生のお話は、生まれたときから高校「世界史」が存在していた後進の我々にとって、とても興味深いものであった。

最後に、お忙しい中を原稿作成の段階でも幾度となく多くのご教示をくださり、原稿が不十分ながら掲載をお許しくださった吉田先生に心から感謝を申し上げます。

（注記に関して、多く文献やホームページの情報を利用させて頂きましたことを申し添えます。）

（文責：茨木智志）